

高度達成者に対する態度に関する経験的検討

心理学科 岩田 紀

抄録：大学生を対象に高度達成者に対する態度に関する研究が行われた。この態度を測定する 20 項目、6 種の架空の成功体験に対する 4 種の人物の認知された嫉妬/祝福反応に関する項目および 6 つの心理的変数に関する項目が使用された。高度達成者に対する「賞賛」と「嫉妬」の因子が抽出された。各場面について「きょうだい」「親友」および「いとこ」の嫉妬/祝福反応の得点を加算した。これらの他者の認知された嫉妬/祝福の得点と高度達成者に対する態度の相関から、嫉妬に関してのみ部分的に有意な負の相関が得られた。また、幸福感・自尊心と他者の認知された嫉妬/祝福との間で有意な正の相関が見出された。最後に、「賞賛」と心理的変数の相関は有意ではなかったが、「嫉妬」には幸福感・自尊心との間で有意な負の相関が認められた。

キーワード：達成者 態度 賞賛 嫉妬

1. はじめに

さまざまな分野において高度な成功を収めた人々は高度達成者と呼ぶことができるが、一般にそのような人々は社会的によく認知されているといえよう。そして社会的によく知られたこのような人々は有名人とか著名人と呼ばれる。ところで、人々は高度達成者に対してどのような態度を持っているのであろうか。そしてその態度は高度達成者に対するさまざまな態度や行動にどのような影響を及ぼすのであろうか。

Feather (1989) はこの分野における先鞭をつけ、以後一連の研究を行っている。Feather (1989) は高度達成者に対するポジティブな記述とネガティブな記述を表す各 10 項目から成る高度達成者尺度 (tall poppy scale) に関するデータを成人から収集し、因子分析を実施している。その結果、2 つの因子を抽出することができたが、ネガティブな記述である 10 項目から成る因子は高度達成者の転落を望む態度を表しており、転落願望 (favor fall) と名づけられた。いっぽう、ポジティブな記述である 10 項目から成る因子は高度達成

者に対する報奨を表しており、報奨願望 (favor reward) と呼ばれた。これら 2 因子と自尊心の関係を検討したところ、自尊心が低い者ほど高度達成者に対する転落願望が強いという関係が認められたが、高度達成者に対する報奨願望と自尊心の間には関連が認められなかった。

Feather (1991), Feather, Volkmer, and McKee (1991) および Feather (1993) は高度達成者に対する態度尺度を用いて、高度達成者に対する転落願望と報奨願望の 2 因子を抽出している。Feather (1989) とほぼ同様に、これらの 3 研究は自尊心が転落願望とは負のそして報奨願望とは正の有意な相関を有することを明らかにしている。また、Feather (1996) は転落願望に関してのみ自尊心との間に有意な負の相関を見出している。さらに、オーストラリアと日本の大学生を対象とした Feather and McKee (1993) の研究はオーストラリアの大学生では転落願望と報奨願望がともに自尊心との間に有意な相関がないことを明らかにしている。しかし日本人に関しては、転落願望と自尊心の間には有意な負の相関が認められた。いっぽう、両群の高度達成者に対する態度を比較する

と、転落願望は日本人大学生がオーストラリア人大学生より有意に強かったが、報奨願望については両群の間に差異が見られなかった。

上述の研究以外に、Feather (1993) は高度達成者尺度を用いて、高度達成者に対する態度と権威主義的傾向の関係を検討している。権威主義的傾向に関して、懲罰的攻撃 (punitive aggression)、恭順 (respectful submission)、伝統尊重 (conventionality) および規則追随 (rule-following) の4因子を抽出している。その結果、高度達成者に対する転落願望は懲罰的攻撃および伝統尊重との間に有意な正の相関、そして規則追随との間には有意な負の相関が得られた。また、報奨願望は規則追随との間に有意な正の相関が認められた。いっぽう、Feather (1992) は平均的なあるいは高い水準の学生あるいはゴルファがこれまでの自分の実績どおりの成績あるいはその実績を下回る成績で終わったという条件を組み合わせた架空のシナリオを読ませてオーストラリアと日本の大学生の反応を分析している。それによると、平均的な実績の者が転落した場合に比べて、高い実績の者が転落した場合には両群がともに「うれしい」と感じるであろうという予測は支持されなかった。

ここに紹介してきた研究はすべてオーストラリアで行われており、Feather (1994) の指摘を待たずともなく、目下のところ、この分野の研究はオーストラリアにおける彼を中心とするものに限られているようである。

本研究は上述の Feather (1991, 1993) および Feather *et al.* (1991) が使用した転落願望と報奨願望を測定する高度達成者に対する態度尺度を参考にして、わが国において適用可能な20項目から成る同様の尺度を開発した。そしてこの尺度を用いて、高度達成者に対する態度と架空の成功体験に対する他者の嫉妬/祝福反応に関する認知の関係について検討した。同時に、高度達成者に対する態度とそれに関連すると推測される心理的変数との関係についても検討を試みた。

方法

被験者 1998年に旧国立T大学で全学共通教育の心理学を受講する工学部夜間主コースの学生と総合科学部の行動科学実験実習を受講する学生が対象であり、最初の授業時間に後述する質問紙への回答を求めた。完全なデータが得られたのは男性64名、女性38名、併せて102名であった。被験者の年齢は18~21歳の者が91名、22歳以上の者が10名そして記入していない者が1名であった。

質問紙 高度達成者に対する態度のうち、高度達成者に対する賞賛と嫉妬の強さを測定するための各10項目、そして高度達成者に対する態度に関連すると推測される心理的変数として幸福感、自尊心、勉強の好き嫌い、自己統制力、対人関係の幅広さおよび平等主義的傾向を測定する各1項目をA4判の用紙の表に印刷している。心理的変数に関して、被験者には各項目の記述が被験者自身にどの程度当てはまるかを判断して5段階評定尺度上の適切な回答に該当する数字を○で囲むように求めた。なお、被験者の回答には各記述がより当てはまるほど高得点になるように1~5の得点を与えた。得点は高得点であるほど心理的変数が意味する傾向が強いことを表している。用紙の裏には、1) 外国への公費留学の試験に合格した、2) 懸賞論文で特選となり賞金50万円を獲得した、3) スポーツの全国大会に出場した、4) 宝くじで2千万円当たった、5) 両親の負担で海外旅行に行かせてくれた、6) 拾ったお金のお礼に持ち主が10万円くれた、の6つのシナリオを印刷している。被験者によって認知された嫉妬/祝福反応に関して、被験者は各シナリオを自分が経験していると想像して、きょうだい、親友、親しくない友達およびいとこが嫉妬/祝福に関してどのように反応するかの判断を求めた。その際、被験者は7段階評定尺度上(非常に嫉妬する、かなり嫉妬する、少し嫉妬する、どちらでもない、少し祝福し

表1 高度達成者に対する態度尺度の因子負荷量

項目/因子	I	II	平均(標準偏差)
1. 非常に成功した人はさまざまな点で恵まれておりうらやましい	27	20	3.37(1.24)
2. 有名人がスキャンダルでマスコミに叩かれているのを見ると 小気味がよい	24	55	2.02(1.07)
3. 普通の人ならともかく有名人がスキャンダルを起こすのは 許せない	00	45	1.63(0.87)
4. 非常に成功した人はスキャンダルで叩かれても仕方がない	20	27	2.60(1.34)
5. 有名人は他の人々を犠牲にして成功したのでその償いを すべきである	04	58	1.71(0.93)
6. 非常に成功した人が失態を演じるのを時には見てみたい	27	56	2.75(1.30)
7. 非常に成功した人はいつもいい思いをしているので 時には辛い思いをするのも良いと思う	-05	59	2.31(1.23)
8. 少数の非常に成功した人だけが良い思いをするのは愉快でない	-06	61	2.69(1.39)
9. 非常に成功した人が世間からちやほやされるのは腹が立つ	-13	64	2.26(1.30)
10. 日本国民の多くは成功した人を本心では快く思っていない	-19	30	2.92(1.15)
11. 非常に成功した人は尊敬に値する	76	07	3.58(1.15)
12. 非常に成功した人が世間からもてはやされるのは当然である	55	-07	3.28(1.31)
13. 非常に成功した人の功績はそれとして評価すべきである	56	06	4.25(0.96)
14. 非常に成功した人には敬意を払うべきである	63	-00	2.93(1.15)
15. 非常な成功を収めることはそれ自体立派である	64	-05	3.84(1.22)
16. 非常に成功した人は大いに社会に貢献している	51	05	2.85(1.09)
17. 非常に成功した人は単なる幸運によって成功したのではない	33	-28	3.95(1.01)
18. 非常に成功した人は人間的にも立派な長所を持っている	30	00	3.18(1.05)
19. 非常に成功した人は社会の大切な宝である	62	02	2.85(1.06)
20. 日本国民の多くは非常に成功した人を心から祝福している	27	05	2.57(0.99)
寄与率(%)	16.1	13.0	

因子負荷量の小数点は省略

てくれる、かなり祝福してくれる、非常に祝福してくれる)の適切な反応を選択した。被験者の反応には、「非常に嫉妬する」を1そして「非常に祝福する」を7とし、1~7の範囲で得点を与えた。したがって、得点4を境にして、「祝福してくれる」という傾向が強いほど高得点そして「嫉妬する」という傾向が強いほど低得点であることを意味している。

手続 質問紙は上述の2つの授業の初日に配布し、被験者にはその場で記入させた。データはStatSoft社のStatistica™を用いて分析した。

結果

高度達成者に対する態度尺度に関する20項目のデータについて主因子法による因子分析を行い、

表2 場面1)に関する因子負荷量

他者/因子	I
きょうだい	.70
親友	.65
親しくない友達	.31
いところ	.57

1) 外国への公費留学の試験に合格した

表3 場面2)に関する因子負荷量

他者/因子	I
きょうだい	.74
親友	.77
親しくない友達	.21
いところ	.49

2) 懸賞論文で特選となり賞金 50 万円を獲得した

表4 場面3)に関する因子負荷量

他者/因子	I
きょうだい	.67
親友	.80
親しくない友達	.38
いところ	.67

3) スポーツの全国大会に出場した

表5 場面4)に関する因子負荷量

他者/因子	I
きょうだい	.66
親友	.73
親しくない友達	.39
いところ	.61

4) 宝くじで2千万円当たった

表6 場面5)に関する因子負荷量

他者/因子	I
きょうだい	.41
親友	.72
親しくない友達	.39
いところ	.57

5) 両親の負担で海外旅行に行かせてくれた

表7 場面6)に関する因子負荷量

他者/因子	I
きょうだい	.76
親友	.81
親しくない友達	.58
いところ	.69

6) 拾ったお金のお礼に持ち主が10万円くれた

固有値1以上の2因子を抽出し、バリマックス回転を施した。なお、相関行列の対角線上の成分には重相関係数の2乗を使用した。因子分析の結果は表1に示されている。それによると、第I因子は項目11~16および項目19の7項目に関して.40以上の因子負荷量を有し、これらの項目の内容から、この因子は高度達成者に対する「賞賛」を表すものと解釈することができる。これら7項目の合計得点を算出し、高度達成者に対する「賞賛」の得点とした。なお、これら7項目に関するクロンバックの α 係数は.796であった。第II因子は

項目2~3および項目5~9の7項目に関して.40以上の因子負荷量を有し、高度達成者に対する「嫉妬」を表すと考えられる。これら7項目の合計得点を算出し、高度達成者に対する「嫉妬」の得点とした。これら7項目に関するクロンバックの α 係数は.757であった。

次に、6種類の成功体験のシナリオに関して、被験者によって認知された4種の人物の嫉妬/祝福反応を用いて因子分析を行い、固有値1以上の因子を抽出しバリマックス回転を施したが、解釈できる因子を抽出することができなかった。そこ

表8 高度達成者に対する態度ならびに心理的変数と
架空の成功体験に対する他者の認知された嫉妬/祝福の相関

場面	1)	2)	3)	4)	5)	6)
高度達成者に対する態度						
賞賛	10	06	01	07	-01	-03
嫉妬	-36*	-13	-25*	-15	-02	-09
心理的変数						
私は幸福である	21*	15	28*	13	04	03
私は自分にプライドを持っている	28*	15	22*	07	04	07
私は高校までの勉強は嫌いであった	12	03	16	-08	-19	11
私は将来の目標のために我慢して行動を コントロールできる	11	-08	-04	-04	-11	-14
私は好き嫌いに関係なく人とうまくやっていける	13	04	19	20*	03	15
私は能力主義の社会よりも平等主義の社会を望む	-05	-15	-07	-07	13	02

相関係数の小数点は省略 * $p < .05$

表9 高度達成者に対する態度と心理的変数の相関

心理的変数/高度達成者に対する態度	賞賛	嫉妬
私は幸福である	07	-39*
私は自分にプライドを持っている	19	-29*
私は高校までの勉強は嫌いであった	-05	10
私は将来の目標のために我慢して行動を コントロールできる	11	04
私は好き嫌いに関係なく人とうまくやっていける	16	-08
私は能力主義の社会よりも平等主義の社会を望む	01	09

相関係数の小数点は省略 * $p < .05$

で、6種のシナリオ別に4種の人物に関する反応を変数として上述と同様の方法で因子分析を行ったが、それらの結果は表2～表7に示されている。それによると、表2～表4については、「親しくない友達」の因子負荷量だけが.40に達していなかった。いっぽう、表5～表7のうち、表6と表7については「親しくない友達」の因子負荷量はほぼ.40に達していた。しかしながら、表2～表7に関して.40を超える因子負荷量が得られた変数は「きょうだい」「親友」そして「いとこ」の

3種の人物であった。そこで、6場面それぞれについて「きょうだい」「親友」および「いとこ」に関する嫉妬/祝福反応の得点を加算して、被験者によって認知された各場面に関する嫉妬/祝福の得点とした。本得点は得点が4より高いほど祝福そして4より低いほど嫉妬がそれぞれ強いことを意味している。

これらの認知された嫉妬/祝福の得点を用いて、高度達成者に対する態度ならびに心理的変数と被験者の架空の成功体験に対する他者の認知された

嫉妬/祝福の間でピアソンの相関係数を算出したが、その結果は表8に示されている。それによると、高度達成者に対する「賞賛」はすべての場面に関する嫉妬/祝福との間で有意な相関が得られなかった。いっぽう、高度達成者に対する「嫉妬」は場面1)の「外国への公費留学の試験に合格した」および場面3)の「スポーツの全国大会に出場した」に関する成功体験に対する他者の認知された嫉妬/祝福との間に有意な負の相関が認められた。

次に、心理的変数については、「私は幸福である」と「私は自分にプライドを持っている」にはともに、場面1)の「外国への公費留学の試験に合格した」および場面3)の「スポーツの全国大会に出場した」に関する架空の成功体験に対する他者の認知された嫉妬/祝福との間で有意な正の相関が見出された。また、「私は好き嫌いに関係なく人とうまくやっていける」には場面4)の「宝くじで2千万円当たった」に関する他者の認知された嫉妬/祝福との間で有意な正の相関が認められた。

最後に、高度達成者に対する態度と6つの心理的変数の間でピアソンの相関係数を算出したが、その結果は表9に示されている。それによると、高度達成者に対する「賞賛」にはすべての心理的変数との間で有意な相関が得られなかった。いっぽう、高度達成者に対する「嫉妬」には「私は幸福である」と「私は自分にプライドを持っている」との間で有意な負の相関が認められた。

考察

高度達成者に対する態度尺度から「賞賛」と「嫉妬」の2因子を抽出することができたが、これらの因子は Feather (1991, 1993) および Feather *et al.* (1991) が抽出した報奨願望と転落願望の因子にそれぞれ相当する。本研究と Feather らの研究で因子が微妙に異なるように見えるのは使用

した項目が両者で異なるためであるといえよう。高度達成者に対するポジティブな典型的態度は高度達成者を褒め称えるという態度であり、このような態度はまさに「賞賛」と呼ぶことが適切である。いっぽう、高度達成者に対するネガティブな態度は高度達成者に対する「嫉妬」であるといえよう。そしてこの「嫉妬」が高度な達成に対する非難・中傷・毀損といったネガティブな行動を引き起こす原動力になると推測することができる。しかも上述の転落願望は「嫉妬」から生じると考えられる。したがって、高度達成者に対する態度は報奨願望と転落願望よりも「賞賛」と「嫉妬」の2因子から成り立っていると考える方が適切であろう。しかも「賞賛」と「嫉妬」の間に有意な相関が認められなかったことから ($r=.07$)、この2因子は互いに独立した次元であるといえよう。

次に、6種類の成功体験のシナリオに対する4種の人物の認知された嫉妬/祝福反応に関する因子分析の結果はシナリオ1)から3)と4)から6)の間で微妙に異なっていた。シナリオ1)から3)に描かれた場面は自分の能力と努力が達成のために不可欠な場面であり、4種の人物のうち、「親しくない友達」だけが因子負荷量.40に達していなかった。このことはこのような場面では「親しくない友達」を除く「きょうだい」「親友」および「いとこ」だけが類似した嫉妬/祝福反応を示すことを示唆している。いっぽう、シナリオ4)から6)は成功が能力や努力ではなく幸運や偶然に依存する場面であり、因子負荷量.40にほぼ達する「親しくない友達」を含めると、すべての人物が類似した嫉妬/祝福の反応を示すことが推測される。場面の違いによる嫉妬/祝福反応に関する上述のような差異が存在するか否かについては本研究の結果によって速断することは適切ではなく、今後の更なる検討が必要であろう。

さらに、高度達成者に対する態度と架空の成功体験に対する他者の認知された嫉妬/祝福反応の関係に移ると、高度達成者に対する「賞賛」には

この嫉妬/祝福反応との間に有意な相関が見られなかったが、高度達成者に対する「嫉妬」については、「嫉妬」が強い者ほど認知された嫉妬反応が強いあるいは祝福反応が弱いという関係が認められた。しかも有意な負の相関が認められたのは場面1)と3)であり、両場面はともに能力と努力が不可欠な場面であった。このように、「賞賛」と「嫉妬」に関して異なる結果が得られたが、その理由は明らかでない。

次に、心理的変数と架空の成功体験に対する他者の認知された嫉妬/祝福反応の関係については、場面1)と3)に関して、「私は自分にプライドを持っている」という記述を強く肯定する者ほど認知された嫉妬反応がより弱いあるいは祝福反応がより強いという有意な関係が認められた。この結果は自尊心と転落願望の間に有意な負の相関を見出した Feather (1991, 1993, 1996) の研究結果と一致している。なお、場面1)から3)は達成のために能力と努力が不可欠な場面であるにもかかわらず、場面2)に関して上述のような結果が得られなかった理由は明らかでない。成功が幸運や偶然に依存する場面4)から6)については上述のような関係が認められなかった。これらの結果は「私は自分にプライドを持っている」に関する自己評定と自分の架空の成功体験に対する他者の認知された嫉妬/祝福反応の間に認められた上述のような関係が達成のために能力と努力が不可欠な達成場面に関してのみ成立することを示唆しているように見えるが、この点に関しては今後の更なる検討が必要であろう。「私は好き嫌いに関係なく人とうまくやっていける」に関しては、場面4)との間で、この記述を強く肯定する者ほど自らの架空の成功体験に対する他者の認知された嫉妬がより弱いあるいは祝福がより強いという有意な関係が認められた。しかしなぜ場面4)に関してのみこのような関係が見出されたかについてはつまびらかでない。

上述の2つ以外の心理的変数と自らの架空の成

功体験に対する他者の認知された嫉妬/祝福反応の関係は有意でなかったが、なお今後の検討が必要であろう。

最後に、高度達成者に対する2つの態度と6つの心理的変数の関係について、高度達成者に対する「賞賛」はすべての心理的変数との間で有意な相関が認められなかった。それに対して、高度達成者に対する「嫉妬」については、「私は幸福である」という記述を否定する傾向が強い者ほどあるいは「私は自分にプライドを持っている」という記述を否定する傾向が強い者ほど高度達成者に対する嫉妬が強いあるいは祝福が弱いという関係が認められた。このことは自分が不幸であると思っている者あるいは自らのプライドが低い者ほど高度達成者に対する嫉妬が強いことを意味している。そしてこれら2つの記述に対する反応の間には低い有意な相関 ($r = .36, p < .05$) が認められた。嫉妬はみじめな自分に比べてはるかに幸福な状況にある人に対して湧き出る感情であり、プライドの低さによって生じるものではない。

アメリカが成功を収めるための機会が平等に与えられることを重視する社会であるのに対して、わが国がそのような機会ではなく平等な結果を重視する社会であることはよく知られている。第2次世界大戦後、わが国ではマスメディアの強力な影響と学校教育によって人は平等に処遇されるべきであるとする平等主義が社会の各層に深く浸透してきた。その結果、今ではその面影が無残にも消え去ってしまったが、比較的最近まで、80パーセントを超える人々が中流意識を持っている時代があった。しかし、近年の経済の急速なグローバル化の中で、市場原理主義の信奉者たちによってさまざまな規制が撤廃され、わが国は自由放任主義ともいえる弱肉強食の時代に突入していった。その結果、今日からすれば桃源郷のようであった、かつての比較的平等な社会が急速に崩れ去り、少数のいわゆる勝ち組と多数の負け組を生み出し、地域間の所得格差を著しく拡大させ、

いわゆる格差社会を招来することになった。このような格差社会の中で、貧困層に属する多くの人々は「自分だけがなぜ不幸なのか」あるいは「自分だけがなぜ不遇なのか」といった不平等感から来る強い嫉妬を持つことになるであろう。特に、つい最近まで平等主義を刷り込まれた日本人は所得格差に対して非常に敏感になっており、幸せそうに見える人々や社会的に成功を収めた人々に対する嫉妬が強くなるものと推測される。その意味において、今日のが国はまさに「嫉妬の時代」に突入しているといっても過言ではない。そしてこのような強い嫉妬が幸せそうに見える人々や彼らが生活している社会に対して反社会的行動や犯罪という怒りの刃を向けさせることになるであろう。

したがって、嫉妬と犯罪の関係そして嫉妬と社会的行動の関係など、嫉妬に関する研究は今日のが国の心理学における重要な課題であるといえよう。

引用文献

- Feather, N. T. (1989). Attitudes towards the high achiever: The fall of the tall poppy. *Australian Journal of Psychology*, *41*, 239-267.
- Feather, N. T. (1991). Attitudes towards the high achiever: Effects of perceiver's own level of competence. *Australian Journal of Psychology*, *43*, 121-124.
- Feather, N. T. (1993). Authoritarianism and attitudes toward high achievers. *Journal of Personality and Social Psychology*, *65*, 152-164.
- Feather, N. T. (1994). Attitudes toward high achievers and reactions to their fall: Theory and research concerning tall poppies. *Advances in Experimental Social Psychology*, *26*, 1-73.
- Feather, N. T. (1996). Values, deservingness, and attitudes toward high achievers: Research on tall poppies. In C. Seligman, J. M. Olson, and M. P. Zanna (Eds.), *The psychology of values: The Ontario symposium, Vol. 8*. Mahwah, N. J.: Erlbaum.
- Feather, N. T., & McKee, I. R. (1992). Australian and Japanese attitudes towards the fall of high achievers. *Australian Journal of Psychology*, *44*, 87-93.
- Feather, N. T., & McKee, I. R. (1993). Global self-esteem and attitudes toward the achiever for Australian and Japanese students. *Social Psychology Quarterly*, *56*, 65-76.
- Feather, N. T., Volkmer, R. E., & McKee, I. R. (1991). Attitudes towards high achievers in public life: Attributions, deservingness, personality, and affect. *Australian Journal of Psychology*, *43*, 85-91.

An empirical examination of attitudes toward high achievers

Osaka Shoin Women's University
Osamu IWATA

ABSTRACT

Questionnaires were administered to male and female undergraduates at a national university to investigate relationships among attitudes toward high achievers, judged jealousy/blessing to imaginary successful experiences of six scenarios and six psychological variables. A 20-item five-point scale of attitudes toward high achievers produced two factors, "praise" and "jealousy." Regarding the scenarios, subjects were imagined to have a successful experience in each scenario and was asked to judge four target persons' degree of jealousy/blessing to the success on a seven-point scale. Although jealousy was partially correlated with the perceived jealousy/blessing, praise was not significantly correlated with this perceived measure. A few of the six psychological variables were partially correlated with the perceived jealousy/blessing. Regarding attitudes toward high achievers, praise did not correlate with the psychological variables. On the other hand, jealousy significantly correlated with these variables partially.